

令和7年2月20日

令和6年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 野村萬）は、芸術上の功績顕著な芸術家15名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和6年8月下旬、10月下旬に開催した会員候補者推薦委員会、及び11月下旬に開催した各部の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員による投票を経て会員候補者を内定し、会員総会の承認を経て令和7年2月10日に15名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和7年3月1日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴（本人確認済）等は別添資料を御覧ください。）

【第一部（美術）】

第一分科（絵画）	なかばやし ただよし 中林 忠良
第三分科（工芸）	おおひ としお なら としお 大樋 年雄（本名：奈良 年夫）
第五分科（建築・デザイン）	くま けんご 隈 研吾
第五分科（建築・デザイン）	ばん しげる 坂 茂
第六分科（写真・映像）	じゅうもんじ びしん 十文字 美信
第六分科（写真・映像）	はたけやま なお や 畠山 直哉

【第二部（文芸）】

第七分科（小説・戯曲）	た わ だ ようこ 多和田 葉子
第八分科（詩歌）	ふじい さだかず 藤井 貞和

【第三部（音楽・演劇・舞踊）】

第十二分科（歌舞伎）	なかむら かいしゅん ひらの とよひで 中村 魁春（本名：平野 豊栄）
第十三分科（文楽）	きりたけ かんじゅうろう みやなが とよみ 桐竹 勘十郎（本名：宮永 豊実）
第十五分科（洋楽）	おたか ただあき 尾高 忠明
第十七分科（演劇）	の だ ひでき 野田 秀樹
第十七分科（演劇）	はしづめ いきお 橋爪 功
第十八分科（映画）	とみの よしゆき とみの よしゆき 富野 由悠季（本名：富野 喜幸）
第十八分科（映画）	ばいしやう ちえこ ころく ちえこ 倍賞 千恵子（本名：小六 千恵子）

※各部の分科順、雅号・筆名・芸名の五十音順で記載しています。

<担当>

日本芸術院

事務長 植垣 健一

庶務係長 鈴木 啓太

電話 03-3821-7191

絵画

なか ばやし ただ よし
中 林 忠 良



推薦理由

中林忠良氏は、60年以上にわたり銅版画の表現を追求し、かつその第一人者として活躍してきた。欧米各地の美術館に作品が所蔵されるなど世界的にも高く評価され、令和5年度には文化功労者にも選ばれている。中林氏は、とりわけ銅版画の腐食技法が持つ可能性を徹底的に追及し、そうした理知的な探求から産み出された斬新なイメージは、銅版画の新たな地平を切り開いたと言っても過言ではない。その作品は、白と黒の二色の調和と拮抗によって、いかに多彩で深淵な意味を孕んだ世界が織りなされうるかを明らかにしている。

【略歴】

- 昭和12年9月17日 東京都生まれ 87歳
- 昭和38年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業（同40年同大学院美術研究科版画専攻修了）
- 昭和40年 東京藝術大学美術学部絵画科副手（同41年非常勤講師、同44年助手、同49年講師、同53年助教授、平成元年教授、同17年名誉教授、現在まで）
- 昭和50年 文部省派遣在外研究員としてパリ国立美術学校、ハンブルク造形芸術大学で研修（同51年まで）
- 昭和58年 日本版画協会理事（平成18年理事長、令和6年名誉会員、現在まで）
- 令和2年 （一社）日本美術家連盟理事長（現在まで）

【賞歴】

- 昭和58年 中華民国国際版画ビエンナーレ国際大賞
- 昭和61年 ソウル国際版画ビエンナーレ国際大賞
- 昭和62年 ヴァルナ国際版画ビエンナーレ銀賞
- 平成15年 紫綬褒章
- 平成26年 瑞宝中綬章
- 令和5年 文化功労者

工芸

おお ひ とし お
大 樋 年 雄
(本名 なら としお
奈良 年夫)



推薦理由

大樋年雄氏のボストン大学大学院留学時からの作品発表や公開制作は、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの国々へと世界に拡がり、その活動は現代美術家としてだけではなく、茶道をはじめとした日本の文化や工芸を伝導し、大英博物館（英国）をはじめとした国内外の美術館や公共施設に作品が所蔵されている。また、ハンガリー国家勲章叙勲、恩賜賞・日本芸術院賞、外務大臣表彰など数々の受賞を重ね、360年にわたる金沢・大樋焼十一代としての伝統の継承と、海外から学び得てきた独自の知見は、日本の工芸に新たな領域の拡大や国際化に寄与している。

【略歴】

昭和33年6月8日 石川県生まれ 66歳

昭和60年 ボストン大学プログラムインアーティザンリー大学院修士課程修了 (M.F.A)

平成9年 米国ロチェスター工科大学客員教授 (現在まで)

平成11年 国際陶芸アカデミー(IAC)会員 (現在まで)

平成21年 金沢大学客員教授 (現在まで)

平成28年 十一代大樋長左衛門襲名

【賞歴】

平成16年 グッドデザイン賞

平成27年 日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞

令和3年 日展文部科学大臣賞

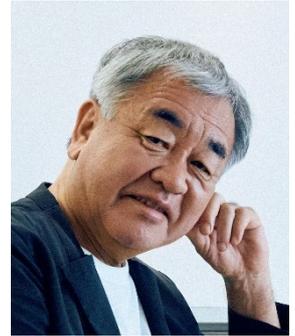
令和4年 ハンガリー国騎士十字功労勲章ハンガリー国家勲章

令和5年 恩賜賞・日本芸術院賞

令和6年 外務大臣表彰

建築・デザイン

くま けん ご
隈 研 吾



(©Designhouse)

推薦理由

隈研吾氏の作品は「和の建築」と言われるが、氏は荘厳重厚な造形を第一義的には追わず、地中に埋めて建築を気配で示したり、ガラスを多用して境界を透明化させ、主客未分の意識を提言したりして、既存の西洋的建築像を揺さぶる。これは氏の建築理論によって示された和の概念の究極であろう。この挑戦的な建築は「奥の細道」や「方丈記」にも通じる無常の芸術的モニュメントでもあろうか。隈氏は日本建築界の鬼才である。

【略歴】

昭和29年8月8日 神奈川県生まれ 70歳

昭和52年 東京大学工学部建築学科卒業(同54年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了)

昭和60年 コロンビア大学建築・都市計画学科研究員(同61年まで、平成6年同大学院建築・都市計画学科講師)

平成2年 隈研吾建築都市設計事務所設立

平成10年 慶應義塾大学特別招聘教授(同11年まで、同13年客員教授、同19年教授、同21年まで)

平成21年 東京大学工学部教授(令和2年特別教授・名誉教授、現在まで)

【賞歴】

平成9年 日本建築学会賞(作品)

平成13年 村野藤吾賞

平成14年 スピリット・オブ・ネイチャー国際木の建築賞

令和元年 紫綬褒章

令和6年 恩賜賞・日本芸術院賞

ばん
坂

しげる
茂



推薦理由

坂茂氏は、きわめて今日的課題を作品に反映させている建築家の一人である。国内はもとより、国外でのプロジェクトも多く、平成26年にプリツカー賞を受けた。周知のとおり災害地における仮設住宅、緊急避難所の設計にも尽力し、人間生活を助ける即効性の高い仕事は特筆すべきものである。また各地の暮らし、そして環境特性をふまえることによって、素材の選択、周辺景観との整合をはかり、建物と人々の関係性を深めている。こうした建築家としての取り組みは、現在から未来に向けての暮らしかたや人間の在りどころを示し、作品それぞれはこれを体現しているといえる。

【略歴】

昭和32年8月5日 東京都生まれ 67歳

昭和59年 クーパー・ユニオン建築学部卒業

昭和60年 坂茂建築設計設立

平成7年 NPO法人ボランタリー・アーキテクト・ネットワーク (VAN) 設立

平成13年 慶應義塾大学環境情報学部特別招聘教授 (同14年教授、同20年特別招聘教授、同21年まで、同27年特別招聘教授、令和元年教授、同5年まで)

平成23年 京都造形芸術大学 (現・京都芸術大学) 芸術学部環境デザイン学科教授 (現在まで)

令和5年 芝浦工業大学建築学部特別招聘教授 (現在まで)

【賞歴】

平成8年 毎日デザイン賞大賞

平成20年 フランス国家功労勲章オフィシエ

平成26年 プリツカー建築賞

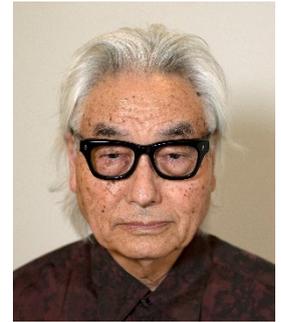
平成26年 フランス芸術文化勲章コマンドゥール

平成29年 紫綬褒章

令和6年 高松宮殿下記念世界文化賞

写真・映像

じゅうもんじびしん
十文字美信



(撮影 山口 徹)

推薦理由

十文字美信氏は、被写体の秘められた内面や空気感を透かし出すように写し撮る比類なき写真家である。広告写真にも積極的にかかわり、広告の限界を押し広げたと言われ、その業績もまさに芸術として評価されるにふさわしい。依頼されたポートレートはフランク・シナトラ、アンディ・ウォーホル等々、多くの国際的芸術家に高く評価されたことの証である。近年刊行の「大乘寺十三室」(小学館)で対峙した円山派の襖絵は謎に満ちた美の極致を捉え、巨匠写真家としての面目躍如たる世界を押し広げた。十文字氏は日本芸術院待望の写真界の重鎮である。

【略歴】

昭和22年3月4日 神奈川県生まれ 77歳
平成16年 多摩美術大学教授(同26年まで)
令和6年 APA 名誉会員

【賞歴】

昭和50年 東京アートディレクターズクラブADC賞(後4回)
昭和52年 日本写真協会新人賞
昭和61年 東京アートディレクターズクラブADC制作者賞
昭和55年 伊奈信男賞
平成3年 土門拳賞
平成20年 日本写真協会作家賞

写真・映像

はたけ やま なお や
畠 山 直 哉



(©buero fuer kunstdokumentation)

推薦理由

畠山直哉氏は建築の建設現場や解体現場、地下水路、擁壁に囲まれた河川など都市の裏側の写真を撮り続けているが、氏の手にかかるとそれらは例えようもなく美しい芸術性の高い写真に変わる。畠山氏は自らの手でプリントを行って、作者の美しい内的風景に変えてしまうからである。東日本大震災によって畠山氏は陸前高田の実家と母を喪った。震災を通じて畠山氏は、自らの写真の意味を問い直そうとしているのではないか。誠実で真摯に写真と向かい合う姿勢は、日本芸術院会員としてふさわしい。

【略歴】

昭和33年3月19日 岩手県陸前高田市生まれ 66歳

昭和56年 筑波大学芸術専門学群総合造形コース卒業（同59年同大学院芸術研究科修士課程デザイン専攻修了）

平成27年 文化庁文化交流使としてメキシコ、インド、フランスに派遣（同28年まで）

平成28年 東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻教授（現在まで）

【賞歴】

平成9年 木村伊兵衛写真賞

平成12年 写真の町東川賞国内作家賞

平成13年 毎日芸術賞

平成15年 日本写真協会賞年度賞

平成24年 芸術選奨文部科学大臣賞

平成24年 ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館参加 金獅子賞

平成27年 紫綬褒章

平成28年 日本写真協会賞作家賞

小説・戯曲

た　　わ　　だ　　よう　　こ
多　　和　　田　　葉　　子



推薦理由

多和田葉子氏は、現在日本を代表する小説家の一人であり、その作品は詩的言語と物語的言語を巧みに融合、駆使して、芸術性の高さ、完成度において傑出している。多くの作品は外国語（英語、ドイツ語、中国語等）に翻訳・出版され、高い評価と多くの読者を獲得している。またドイツ語による創作を行うことで、これまでの日本の文学になかった越境的思考に基づいた新しい言語空間を創出するという活動も高く評価されよう。令和5年度（第80回）恩賜賞・日本芸術院賞の受賞者である。

【略歴】

昭和35年3月23日 東京都生まれ 64歳

昭和57年 早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業

平成12年 チューリッヒ大学大学院ドイツ文学博士課程修了（文学博士）

【賞歴】

平成 5年 芥川龍之介賞

平成15年 谷崎潤一郎賞

平成25年 読売文学賞 小説賞

平成28年 クライスト賞

平成30年 国際交流基金賞

平成30年 全米図書賞 翻訳文学部門

令和 2年 朝日賞

令和 2年 紫綬褒章

令和 5年 毎日出版文化賞

令和 6年 恩賜賞・日本芸術院賞

詩歌

ふじ い さだ かず
藤 井 貞 和



推薦理由

藤井貞和氏には、永年にわたる、途絶えることのない、詩作、詩論活動に加えて、東京大学教授として、『源氏物語』研究の泰斗としての盛名もあり、加えて古文学、歌謡、南島論の刮目すべき成果がある。湾岸戦争以来の現実社会への直視の持続がある。そのことだけでも余人の追随をゆるさぬところなのだが、それらを「実作」に結びつけ、絶えることなく、……ここに藤井氏の偉業といっても過言ではない達成があり、日本芸術院会員たるにふさわしい。「学匠詩人」をはるかに越えて、かの釈迢空=折口信夫にも譬えるに足る逸材である。

【略歴】

昭和17年4月27日 東京都生まれ 82歳
昭和41年 東京大学文学部卒業
昭和54年 東京学芸大学助教授（平成4年教授、同7年まで）
平成4年 東京大学文学博士学位取得
平成7年 東京大学教養学部教授（同16年名誉教授）
平成16年 立正大学文学部教授（同25年まで）

【賞歴】

平成20年 伊波普猷賞
平成24年 芸術選奨文部科学大臣賞
平成24年 鮎川信夫賞 詩集部門
令和2年 毎日出版文化賞 文学・芸術部門
令和5年 読売文学賞 詩歌俳句賞
令和5年 日本芸術院賞

歌舞伎

なか むら かい しゅん
中 村 魁 春
(本名 ひらの とよひで
平野 豊栄)



推薦理由

中村魁春氏は、養父故六代目中村歌右衛門の薫陶を受け、歌舞伎の本道を歩み続け品格のある芸風を身に付け、古風な持ち味から義太夫物では立女形としての格のある舞台を、世話物の女房役も情があり相手を立てる心遣いを持ち上品に舞台を務めている。歌右衛門の芸を引き継ぐとともに最近では若手の指導にも力を入れており、その丁寧な教え方で信頼を得ている。現代の歌舞伎界を代表する俳優の一人である。

【略歴】

昭和23年1月1日 神奈川県生まれ 77歳

昭和30年 六代目中村歌右衛門の養子となる

昭和31年 歌舞伎座「蜘蛛の拍子舞」の翫才で加賀屋橋之助を名乗り初舞台

昭和42年 歌舞伎座「妹背山婦女庭訓」吉野川の雛鳥他で五代目中村松江を襲名

昭和47年 (社)日本俳優協会監事 (同52年評議員、平成11年理事、令和5年常任理事、現在まで
※現公益社団法人)

昭和49年 (社)伝統歌舞伎保存会会員 (現在まで)

昭和49年 重要無形文化財「歌舞伎」(総合認定)保持者

平成14年 歌舞伎座「忍夜恋曲者」滝夜叉姫、「本朝廿四孝」の八重垣姫で二代目中村魁春を襲名

【賞歴】

平成5年 眞山青果賞奨励賞

平成5年 日本芸術院賞

平成6年 名古屋演劇ペンクラブ年間賞

平成20年 紫綬褒章

文楽

きり たけ かん じゅう ろう
桐 竹 勘 十 郎

(本名 みやなが とよみ
宮永 豊実)



(撮影 小川 知子)

推薦理由

桐竹勘十郎氏は、現代の文楽を代表する人形遣いの一人である。文楽人形を遣う高度な技術はいまや、人形と人形遣いが一体化するほどの境地にあり、登場人物の複雑な心理や葛藤を迫力たっぷりに、また繊細に表現。立役から女方までオールラウンドプレーヤーとして、文楽の奥深さを体現している。海外公演も多く、世界中に文楽の魅力を発信。古典だけでなく、自ら新作文楽を創作したり、現代美術とコラボレーションを行ったりと、ジャンルを超えて文楽の可能性を追求、芸術文化の発展振興になくてはならない人材である。

【略歴】

- 昭和28年3月1日 大阪府生まれ 72歳
- 昭和42年 三代吉田蓑助に入門、吉田蓑太郎を名乗る
- 昭和62年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽」（総合認定）保持者
- 平成14年 国立文楽劇場養成所講師（現在まで）
- 平成15年 三代桐竹勘十郎を襲名
- 平成16年 大阪市立大学（現・大阪公立大学）文学部特別授業上方文化講座非常勤講師（同30年客員教授、令和4年特別客員教授、現在まで）
- 令和3年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽人形」（各個認定）保持者

【賞歴】

- 平成20年 芸術選奨文部科学大臣賞
- 平成20年 紫綬褒章
- 平成22年 日本芸術院賞
- 平成24年 大阪文化賞
- 平成28年 毎日芸術賞
- 平成30年 伝統文化ポニー賞優秀賞

洋楽

お 尾 高 忠 明
たか ただ あき



推薦理由

尾高忠明氏は、早くから国内各地のオーケストラ（NHK 交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、札幌交響楽団、読売日本交響楽団など）の要職を歴任するとともに、国外でも BBC ウェールズ交響楽団の首席指揮者を務めるなど指揮者として内外で活躍。また新国立劇場オペラ部門の芸術監督も務めた。若いころからその端正で真摯な音楽作りには定評があったが、平成30年に大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督に就任してからは、音楽解釈に一段と奥行きの深さを見せ、現在我が国の指揮界でトップに位置する一人である。国内の二つの重要な音楽賞も受賞しており、日本芸術院会員に相応しい人である。

【略歴】

- 昭和22年 神奈川県生まれ
- 昭和49年 東京フィルハーモニー交響楽団常任指揮者（平成3年桂冠指揮者、現在まで）
- 昭和56年 札幌交響楽団正指揮者（同61年まで、平成10年ミュージックアドバイザー/常任指揮者、同16年音楽監督、同27年名誉音楽監督、現在まで）
- 昭和62年 BBC ウェールズ交響楽団（現・BBC ウェールズ・ナショナル管弦楽団）首席指揮者（平成8年桂冠指揮者、現在まで）
- 平成4年 読売日本交響楽団常任指揮者（同10年名誉客演指揮者、現在まで）
- 平成20年 新国立劇場オペラ部門芸術参与（同22年オペラ部門芸術監督、同26年まで）
- 平成22年 NHK 交響楽団正指揮者（現在まで）
- 平成29年 大阪フィルハーモニー交響楽団ミュージックアドバイザー（同30年音楽監督、現在まで）

【賞歴】

- 平成4年 サントリー音楽賞
- 平成9年 大英帝国勲章CBE
- 平成11年 エルガー・メダル
- 令和元年 JXIG音楽賞 洋楽部門（本賞）
- 令和3年 旭日小綬章

演劇

の だ ひで き
野 田 秀 樹



推薦理由

野田秀樹氏は日本の演劇界において稀有な才能の持ち主である。長年オリジナルの舞台脚本を制作、演出をしている。何度も海外公演を行い、高い評価を受けている。野田氏の言葉は比喻と詩のセンスで溢れている。笑いもある。拉致問題やシベリア抑留、長崎の原爆、その美しさと重さの衝撃には幕が降りた後、座席から立ち上がれないほどだ。声にも言葉にもならない。野田氏は舞台上で存在の不安定さを語り続けている。我々は何者なのか。どこから来てどこへ行くのかと。解答のない問いを。

【略歴】

昭和30年12月20日 長崎県生まれ 69歳

昭和51年 東京大学演劇研究会を母体として「劇団 夢の遊眠社」結成（平成4年まで）

平成4年 文化庁芸術家在外研修（現・新進芸術家海外研修）制度にて英国・ロンドン渡航（同5年まで）

平成5年 NODA・MAP（野田地区）設立

平成21年 東京芸術劇場芸術監督（現在まで）

【賞歴】

昭和58年 岸田國土戯曲賞

平成3年 文化庁芸術祭賞

平成20年 読売演劇大賞大賞・最優秀作品賞・最優秀男優賞・最優秀演出家賞

平成21年 大英帝国勲章OBE

平成22年 朝日賞

平成23年 紫綬褒章

令和5年 ISPA2023 Distinguished Artist Award

演劇

はし づめ いさお
橋 爪 功



推薦理由

橋爪功氏は現代の演劇界を代表する俳優の一人である。文学座から劇団雲を経て演劇集団円の結成に参加し、今日に至るまで舞台上で優れた活動を示してきた。シェークスピア、チェーホフなどの海外古典作品から野田秀樹氏の新作まで主役でも脇にまわっても卓越した台詞術と身体能力を駆使して観客を魅了する。「レインマン」のハンディを持つバビット、「ゴドーを待ちながら」のウラジミール、二人芝居「謎の変奏曲」の裏のある作家ズノルコ、「Le pere 父」のアルツハイマーの症状がでてきた自身の変化に戸惑う父親など印象に残る役は多い。

【略歴】

昭和16年9月17日 大阪府生まれ 83歳

昭和50年 演劇集団 円 設立・参加（平成18年代表、令和5年まで）

【賞歴】

平成 9年 日本アカデミー賞優秀主演男優賞（後1回）

平成20年 読売演劇大賞優秀男優賞・選考委員特別賞

平成22年 放送文化基金賞個別分野部門演技賞

平成24年 紀伊國屋演劇賞個人賞

平成29年 芸術選奨文部科学大臣賞

平成30年 読売演劇大賞最優秀男優賞

平成31年 菊田一夫演劇賞

令和 2年 読売演劇大賞大賞・最優秀男優賞

令和 2年 橋田賞

令和 3年 旭日小綬章

映画

とみ の よし ゆ き
富 野 由 悠 季
(本名 とみの よしゆき
富野 喜幸)



推薦理由

富野由悠季氏は、日本を代表するアニメーション監督の一人であり、ロボットアニメにリアルな戦争観・歴史観を導入してアニメ史に一時代を画した「機動戦士ガンダム」ほか、数多くのヒット作を手掛けるとともに、演出術を解説した著作などによっても、後進に絶大な影響を及ぼしている。手塚治虫の虫プロダクションで「鉄腕アトム」の各話演出からアニメ演出のキャリアをスタートさせ、虫プロ独立後も数多くの作品の演出に携わり、「ガンダム」の成功後も、近年にいたるまでコンスタントに優れた作品を作り続けており、日本のアニメ史そのものの重要な側面を体現する作家だと言える。

【略歴】

昭和16年11月5日 神奈川県生まれ 83歳

昭和39年 日本大学芸術学部映画学科卒業

平成28年 (一社)アニメーツリズム協会理事長 (代表理事) (同29年会長兼理事、令和6年相談役、現在まで)

【賞歴】

昭和50年 児童福祉文化賞映画部門

平成15年 東京アニメアワード

平成17年 アニメーション神戸作品賞 劇場部門

平成18年 シカゴ国際映画祭アニメーション功労賞

平成21年 ロカルノ国際映画祭名誉豹賞

令和 元年 文化庁長官表彰

令和 3年 文化功労者

令和 4年 神奈川文化賞芸術分野

映画

ばい しょう ち え こ
倍 賞 千 恵 子

(本名 ころく ち え こ
小六 千恵子)



推薦理由

倍賞千恵子氏は、昭和36年に映画でデビュー以来主演および準主演の映画、並びにテレビドラマ、舞台出演を経て現在に至る。長い間スターシステムによって膠着化していた映画演技のパターンを破り、彼女が開拓した独特の身体的表現の世界、特に民衆の日常的な生活感情を生き生きと全身で表現するリアリズムの演技法は、映画の世界に大きな影響を与えたと言える。日本における受賞歴は枚挙にいとまがないが、令和5年『PLAN75』でイタリアのウディネ・ファーイースト映画祭でゴールデン・マルベリー賞を獲得している。歌手としても活躍。天才的ともいえる音感の鋭敏さと、広い音域を持つ声帯とシャープな感性でファンに感動を伝え続けている。

【略歴】

昭和16年6月29日 東京都生まれ 83歳

昭和35年 松竹歌劇団入団

令和4年 葛飾区名誉区民

【賞歴】

昭和46年 芸術選奨文部大臣賞

昭和55年 菊田一夫賞演劇賞

昭和56年 日本アカデミー賞最優秀主演女優賞

昭和58年 都民文化スポーツ栄誉章（現・都民文化栄誉章）

平成17年 紫綬褒章

平成24年 日本レコード大賞功労賞

平成25年 旭日小綬章

令和5年 ブルーリボン賞主演女優賞

令和5年 ウディネ・ファーイースト映画祭ゴールデン・マルベリー賞

日本芸術院について

1. 設置目的

日本芸術院は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等芸術各分野の優れた芸術家を優遇するために設けられた栄誉機関として設置。

2. 設置根拠及び沿革

(1) 文部科学省設置法第32条、日本芸術院令

(2) 大正8年、帝国美術院として発足。

昭和12年、文芸、芸能の2部門を加え帝国芸術院に改組、拡充。

昭和22年、日本芸術院に名称変更し、現在に至っている。

3. 組織

日本芸術院は、院長1名と会員（終身）120名以内で構成され、会則により3部18分科に分かれ所属し、本院の設置目的を達するため必要な事業を行う。

院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者について、会員の選挙によって選ばれ文部科学大臣により任命される。

会員は、芸術上の功績顕著な芸術家について、会員からなる部会の推薦（部会における選挙）と総会の承認によって選ばれ、文部科学大臣により任命される。

(令和7年2月1日現在)

院長 野村 萬	第一部（美術）……………現員 43名 部長 奥田 小由女
	第二部（文芸）……………現員 26名 部長 辻原 登
	第三部（音楽、演劇、舞踊）…現員 31名 部長 堤 剛
	事務長—————庶務係

〔定員 計 120名（現員100名）〕

4. 主な事業

① 芸術の発達に寄与する活動を行うとともに、芸術に関する重要事項を審議し、これに関し文部科学大臣又は文化庁長官に意見を述べることができる。

② 会員以外の者で、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して、毎年、恩賜賞と日本芸術院賞を授与している。

③ 前記の他、所蔵作品の公開展示（無料）、日本芸術院賞受賞作品展（無料）、会員による講演会等の開催（無料）、日本芸術院会員記録の制作、日本芸術院の活動記録作製等を行っている。

5. 予算額

令和7年度予算案額 528百万円（うち会員年金303百万円）

令和6年度 518百万円（うち会員年金303百万円）